学習者に社会とのつながりを捉えさせる単元調整の方法
－　単元「財政」の実践を通した自らの振り返りに着目して　－

学籍番号　209328
氏　　名　八尋　慧
主指導教員　峯　明秀

１．問題意識

筆者はこれまでの実習での経験から、「学習者が学びに意欲的に取り組む意義を見出すためにはどうすればよいのか」という問題意識を抱くようになった。先行研究では、教師が学習者の社会認識や価値認識、それらを形成する背景といった「状況」を丁寧に見取り、授業をすることが重要だと指摘されている。しかし、実際に教師がどのようにその営みを行うのかは明らかにされていない。本研究はこれらの問題意識を原点としている。この問いについて実習校の生徒を対象にし、筆者が実際に実践と振り返りをすることによって、同じ「状況」にある学習者を相手にする実習校の先生方への授業改善の示唆となり得るだろう。

２．研究主題

市民性の育成を目指す社会科では、教師はゲートキーパーとして、「子ども」・「社会」・「学問的成果」の3点を拠り所と社会科のねらいを意識し、目標・教科内容・教育方法を連続的に考察・判断し、日々授業の調節をする必要がある。

特に「子ども」を捉えることに焦点を当てた研究は、近年増加している。古田(2020)や田中(2017a)は、アメリカの市民性教育改革やアメリカの社会科教育学研究に着目し、学習者の動機や学習者が置かれた環境・社会文化的背景との関係性を分析し、学習者の文脈と社会科学習を一致させることを通して、学校と社会をつなげることを求めた。「子ども」が置かれている環境や「子ども」の動機と社会科授業にどのような関係があるのかを実証的に調査し、学校と社会とをつなげるための社会科研究・実践へのフィードバックが求められている。

「学校と社会をつなげる」とは、学習者が学校での学びや自分自身と社会とのつながりを捉えるということである。市民性の育成を目指す社会科では、学習者が学校での学びを「生徒」として学校内だけで終わらせてはいけない。学習者が学校での学びや自分自身と社会とのつながりを捉え、「市民」として授業や学校の外でも考え続けよう、行動し続けようという意思を持つようになることが求められている。

実際に、子どもの「状況」を捉え授業化する研究としては、小栗(2018)、小栗・須本(2018)、田中(2017b)などが挙げられる。これらの研究では、①事前に子どもが属する現実の社会的・文化的文脈や子どもが持つ既存の社会認識を調査し、②それらを巻き込みながら授業化し、③実践することで、学校と社会をつなげることを目指している。

一方で、南浦(2014)峯(2021)は、子どもの「状況」は動的なものであり、授業者はカリキュ

ラム・単元・授業の組織・学習指導過程を計画し実践する中で、それぞれの状況に応じて計画・実践を随時、修正・改善することが必要と指摘している。

この指摘を踏まえると、先行研究で明らかとなっている方略に加えて、④実践の最中にも子どもの「状況」を捉え直し、それらを踏まえて授業を実践、修正・改善する過程について、その方法が示される必要がある。では、教師はどのように実践の最中にも子どもの「状況」を捉え直し、それらを踏まえて授業を実践、修正・改善すればいいのだろうか。

３．研究の方法

本研究では、大きく 3 つの段階で研究を行った。

まず、手順の第一は、先行研究を参考に単元「財政」を作成する。教師のゲートキーピング論に基づき、「子ども」・「社会」・「学問的成果」の 3 つの視点を拠り所とし、単元「財政」を作成した(第 2 章)。手順の第二は、教師はどのように単元を調整したのか、筆者自らの行為を振り返り、その実態を明らかにする(第 3 章)。手順の第三は、明らかにした実態から単元調整の方法を抽出し、学習者の学びとの関係性を考察し、抽出した方法は学習者が社会とのつながりを捉えることに効果的であったと言えるのか検証する(第 4 章)。

なお、本研究では社会文化的アプローチを研究手法として用いる。筆者自身が、授業者であり、分析者である。本研究では実習校における、目の前の子どもの状況を見取り、子どもがどのような文脈で授業を価値づけたのかを、分析する過程は非常に重要である。そのための方法論として、社会文化的アプローチを援用し、実習校という「場」の中における意味を描かなければならない。研究対象の中に入り込み、主観的に自身の教師としての営みを描き出すことで、実習校という「場」での実践の価値を見出すことができると考える。

４．本研究の意義と特質

本研究の意義と特質は次の２点にまとめられる。

第一に、単元「財政」の実践を通して、教師が、学習者が捉える現実的な社会を見取り、単元を調整する過程を明らかにしたことである。これまでの子どもの「状況」を捉え授業化する研究では課題として、単元の最中にも学習者の状況を見取る必要性が主張されてきた。本研究では、学習者が単元の学習にどのような価値を見出したかを実証的に明らかにし、それと教師の単元調整と関連付けて考察したことで、教師の単元調整の実態を描き出すことができた。

第二に、学習者が学習内容や自身と社会とのつながりを捉え、「市民」として授業・学校の外でも行動し続けるための、単元調整の方法を仮説的に示すことができたことである。本研究で明らかにした教師の単元調整の方法は、学習者が捉える現実的な社会を、学習者の「生活経験の振り返り」や「認識が異なる他者との交流」に着目し、「自身や学習対象の社会の中での位置づけ」を解釈し、どのような「欲求・困難」を抱えているのか見取り、社会を視点として分析し、「欲求・困難」を解消するよう調整する、というものである。この方法により、生徒は自身や学習内容を社会とつなげることができ、「市民」として授業・学校外でも考え、行動し続ける意思を示す。今回の単元調整の方法は市民性の育成を目指す社会科授業の質の向上の一助となると考えられる。